

情婦 (Witness for the Prosecution)

観賞日 2021年12月13日 上映時間 116分

【概要】

制作 1958年 アメリカ
原作 アガサ・クリスティ (「検察側の証人」)
監督 ビリー・ワイルダー
脚本 ハリー・カーニッツ、ビリー・ワイルダー
撮影 ラッセル・ハーラン
出演 チャールズ・ロートン (ウィルフリッド・ロバーツ)
タイロン・パワー (レナード・ボール)
マレーネ・ディートリヒ (クリスチーネ)
エルザ・ランチェスター (ミス・プリムソル)



【あらすじ】

1952年10月のロンドン。心臓病で入院していた老弁護士ウィルフリッド・ロバーツが2か月ぶりに仕事に復帰し、早速刑事訴訟の依頼が来る。依頼人はレナード・ボール、しがたい発明家だ。事件は資産家の老末亡人が殺害されたエミリー・フレンチ事件でボールは事件の容疑者。貸金庫に保管されていた遺書でボールには8万ポンドの大金が相続される。殺人の動機として十分な金額だ。ウィルフリッドはこの一件を引き受ける決意をする。そこに突然、ボール夫人のクリスチーネが現れる。二人は1945年にハンブルグで結婚したという。やがて開始される陪審員裁判。事件を担当した警察官、被害者の世話をしていたメイドの証言、そして3日目にクリスチーネが検察側の証人として出廷する。彼女はなんと夫のアリバイを覆す証言をする。最終弁論前夜、クリスチーネの証言が偽証であることを証明する謎の手紙が発見され、翌日の陪審員の評決は一転無罪となる。しかし、ここから事件の真相解明と新たな事件が始まる。

流石クリスティと唸らされる二重三重にねじられた結末。法廷ミステリーの傑作。

【解説】

■ポイント

- 原作者：アガサ・クリスティ (1890年～1976年)
 - ・イギリス生まれの推理作家。エルキュール・ポワロ、ミス・マーブルなどの名探偵を産み出し「ミステリーの女王」と呼ばれる。全世界で著作が読まれ「聖書とシェイクスピアの次に読まれている」といわれている。映画化された作品も多い。
 - ・代表作：「アクロイド殺害事件」(1926年)、「オリエント急行殺人事件」(1934年)、「ABC殺人事件」(1935年)、「そして誰もいなくなった」(1939年)
- マレーネ・ディートリヒ (1901年～1992年)
 - ・ベルリン生まれ。1922年「ナポレオンの弟」で銀幕デビュー。1930年「嘆きの天使」のヒットで渡米し「モロッコ」でハリウッドデビュー。ヒトラーからの帰国要請を拒否しアメリカに帰化(1939年)。大戦中はアメリカ軍の前線慰問、反ナチ運動に参加し対独放送で「リリー・マクレーン」を歌う。
 - ・代表作：「モロッコ」(1930年)、「上海特急」(1932年)、スペイン協奏曲(1935年)



■見どころ

- 無罪判決後の予想を超える展開
- イギリス人らしいユーモアに富んだ会話
主人公のウィルフリッドと看護師のミス・プリムソムの絶妙な会話のやり取り
演じたロートンとランチェスターは実の夫婦